男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズム

水島　洋平

あらまし

本稿の目的は、Anderson and Bushman（2002）が提唱したGeneral Aggression Model（以下、GAM）を用いて、男性家族介護者が高齢者虐待を引き起こすメカニズムを、衝動的攻撃と戦略的攻撃の視点から明らかにすることにある。

本稿の分析で用いるGAMは、攻撃行動が生起するまでの段階が想定されており、男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズムを明らかにするうえで有用であると考えられる。

分析の結果、家事や介護行為に追われて内的状態を吟味するための時間的余裕がない、あるいは、介護に没頭してしまうことによって認知的資源に余裕がない男性家族介護者は、即時的評価を通じて衝動的攻撃を行なう可能性が高いことが導き出された。一方、長期間の介護生活を送ることによってもたらされる家事や介護行為への慣れ、介護の否定的側面のみならず肯定的側面への気付き、家族会に参加して介護困難を吐露するなど、内的状態を吟味するための時間や認知的資源に余裕がある男性家族介護者は、衝動的攻撃を選択せず再評価を通じて状況を再解釈し、戦略的攻撃を行なう可能性が高いことが導き出された。最後に、男性家族介護者の「社会的孤立」を防ぐことが、男性家族介護者による高齢者虐待防止のための介入策や支援策のひとつになりうることを提案した。

1. 問題意識

本稿の目的は、Anderson and Bushman（2002）が提唱したGeneral Aggression Model（以下、GAM）を用いて、男性家族介護者[1]が高齢者虐待を引き起こすメカニズムを、衝動的攻撃と戦略的攻撃の視点から明らかにすることにある。

本稿の分析で用いるGAMは、攻撃行動が生起するまでの段階が想定されており、男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズムを明らかにするうえで有用であると考えられる。

近年、男性家族介護者による高齢者虐待が増加傾向にある。春日（2008）は、1990年代と2005年以降に行なわれた高齢者虐待調査の結果を比較し、虐待加害者の「性別」に大きな差がみられることを指摘している。すなわち、90年代諸調査では虐待加害者のうち女性が６割から７割を占めていたが、05年以降諸調査ではそれが逆転し、男性が虐待加害者として占める割合が過半数を超えて、女性より多くなっている[2]。

また、津止・斎藤（2007）は、男性家族介護者による虐待行為として、実際に被介護者に「手を挙げる」と回答した者は31名（「よくある」３名、「時々ある」28名、合計10.5％）であったと報告している。そして、身体的暴力に至らないまでも、「被介護者の要望を無視する」は67名（「よくある」５名、「時々ある」62名、合計22.7％）、「怒る」は112名（「よくある」14名、「時々ある」98名、合計38％）と、その割合は増加傾

[1] 本稿では、職業として介護を行なっている男性介護労働者と区別するために、家族介護を行なっている男性を「男性家族介護者」と表記する。なお、家族介護を行なっている男性を「男性介護者」と表記している先行研究もあるが、そのまま使用する。

[2] 詳しくは、春日（2008），181 - 187頁。この事実は加害者の「続柄」と連動し、90年代諸調査では「息子の妻」が約３分の１を占めていたのに対し、05年以降諸調査では「息子の妻」が占める割合は、虐待加害者中１割に満たず、「息子」の占める割合が最も多くなっている。

向にある[3]。

本稿の構成は、以下の通りである。第２章では、攻撃の定義とタイプを明らかにし、攻撃性に関する理論的立場を整理する。第３章では、本稿の分析で用いるGAMの特徴について論じる。第４章では、個人要因と状況要因をジェンダーの視点から捉えたうえで、衝動的攻撃と戦略的攻撃の視点から、男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズムを分析する。第５章では、分析結果を踏まえて、男性家族介護者による高齢者虐待防止のための介入策や支援策を提案する。

２. 攻撃性に関する理論的立場

本章では、まず、攻撃の定義とタイプを明らかにする。次に、大渕(1993)に従って、攻撃性に関する理論的立場を整理し、情動発散説と社会的機能説について論じる。

2.1　攻撃の定義とタイプ

本節では、高齢者虐待が攻撃行動の一形態であるため、攻撃の定義とタイプを明らかにする。Baron and Richardson(1994)は、攻撃を「危害を避けようとしている他者に対して、危害を加えようと意図的になされる行動」と定義している[4]。

この定義は簡潔であるが、５つの要点が含まれている。第一に、攻撃は感情、動機、態度といった内的状態ではなく、外に表れた行動であること。第二に、他者に危害を加えようとする「意図」が存在すること。第三に、危害は暴力などの身体的損傷に限らず、非難や無視などの精神的苦痛を与える行為も含めること。第四に、人間を対象に危害を加える行為のみを攻撃とみていること。第五に、危険を回避しようとしている他者に危害が加えられた場合に攻撃が限定されていることである[5]。

このように、攻撃の定義には５つの要点が含まれているが、そのなかでも、とりわけ「意図」の重要性に留意する必要がある[6]。すなわち、結果として他者に被害を与えても、それを「意図」したのでなければ攻撃行動とはみなされず、背景に他者を傷つけようとする心理的な「意図」を想定してはじめて、攻撃行動として成立する。

攻撃行動には、「衝動的攻撃」と「戦略的攻撃」の２つのタイプがある。大渕(2000)によれば、衝動的攻撃の特徴は、情動性が強く、自己制御が効かず、何かを達成するためにという目標志向性が弱く、問題解決に役立つという機能性が低いことが挙げられる。一方、戦略的攻撃の特徴は、情動性が弱く、自己制御が強く、目標を達成する手段として攻撃行動が選択され、少なくとも行為者の側は、問題解決に役立つ機能的行動であると信じていることが挙げられる。これら攻撃行動の２つのタイプは、その背後にある心理過程の違いを反映している[7]。

表１　「衝動的攻撃」と「戦略的攻撃」の特徴

特徴	衝動的攻撃	戦略的攻撃
情動性	強い。怒り、恐怖など。	弱い。理性的。
自己制御	弱い。 意志的コントロールが困難。	強い。 意志的コントロールが可能。
目標志向性	攻撃行動の目標が不明確。	目標達成の手段として攻撃行動を選択。
機能性	問題解決に役立たない。	問題解決に役立つことがある。

〈出典：大渕(2000)，12頁より引用、一部改変〉

2.2　攻撃性に関する理論的立場

大渕(1993)は、攻撃性に関する理論的立場を、動機づけの観点から「内的衝動説」、「情動発散説」、「社会的機能説」の３つのパースペクティブに分類している[8]。

[3] 津止・斎藤(2007)，60頁。津止・斎藤(2007)が日本生活協同組合連合会医療部会(以下、医療生協)と共同で実施した「男性介護者の介護実態に関する全国調査」(2006年10月から11月に実施)では、全国20の医療生協(17都府県)にある介護事業所、病院・診療所の職員を通じて500部配票し、郵送による回収を行なった。有効回収票数295票、有効回収率59%であった。
[4] 詳しくは、Baron and Richardson(1994)，p. 7を参照。
[5] これら５点については、大坊・安藤(1995)，131頁、藤原(2009)，117‐118頁が詳しい。
[6] 攻撃行動の意図性の問題について詳しくは、湯川(2001)，63‐69頁を参照。
[7] 大渕(2000)，10‐12頁。
[8] 大渕(1993)，７‐13頁。

内的衝動説では、個体内に攻撃や破壊を求める欲望が存在し、それが高まることによって攻撃行動が動機づけられるとみなされる。攻撃を本能とみなすこの理論は、現在では科学的根拠が乏しい説として否定され、何らかの状況的な手がかりが攻撃行動を生起させるという視点が一般的である[9]。

一方、情動発散説と社会的機能説では内的衝動を仮定せず、攻撃行動は直面している状況に対する反応であるとみなされる。衝動的攻撃の生起過程を説明する情動発散説では、嫌悪事象によって喚起された不快情動が、自動的に攻撃反応を生起させると主張する[10]のに対して、戦略的攻撃の生起過程を説明する社会的機能説では、社会的葛藤を解決する道具的手段として、攻撃行動が選択されると主張する。

衝動的攻撃の生起過程を説明する情動発散説の代表的理論として、不快感情の役割を強調したBerkowitz（1989）の「認知的新連合理論」が挙げられる。この理論の特徴は、以下の３点である。第一に、怒りや憎しみなどの敵対的情動のみならず、抑うつ、悲しみや憐れみなどの情動、暑さや寒さ、騒音や悪臭といった環境ストレス、欲求不満や挑発、自尊心への脅威といったあらゆる嫌悪事象が、攻撃反応を喚起する不快感情を生み出すとした点である。第二に、人間の心のなかでは、種々の感情、思考、運動スクリプトが相互に結びついて心的ネットワークを形成しており、不快感情が経験されると、これと結合している攻撃的な観念や記憶、反応スクリプトが活性化されるとした点である。第三に、不快感情によって生起した攻撃反応は非機能的なもので、不快感情の発散が攻撃行動の目標であるとした点である[11]。

戦略的攻撃の生起過程を説明する社会的機能説の代表的理論として、攻撃行動が選択される意思決定過程に着目した大渕（1987）の「攻撃機能論」と、Tedeschi and Felson（1994）の「強制行為に関する社会的相互作用論」が挙げられる。

大渕（1993）によれば、大渕（1987）の理論の特徴は、以下の３点である[12]。第一に、現実のあるいは予想された対立・抗争など、社会的葛藤が攻撃に先行するという点である[13]。第二に、対人的な目標達成のための手段として、攻撃行動が選択されるとみなされる点である。第三に、攻撃行動が選択される個人の認知過程を重視する点である[14]。

Krahé（2001=2004）は、Tedeschi and Felson（1994）の理論の重要な貢献は、他者に影響を及ぼそうとして行なわれた他の形態の社会行動と同じ文脈に、攻撃行動を位置づけたことであると指摘している。この理論では、内的衝動説が仮定する生得的な本能や、情動発散説が仮定する強い不快感情によって攻撃行動へと駆り立てられるのではなく、個人は自分の攻撃的な反応レパートリーを制御し、非攻撃的な選択肢を選択することができるとみなされている[15]。

---

[9] 福野（2007），90頁。内的衝動説について詳しくは、大渕（1993），８‐10頁を参照。

[10] こうした考え方の先駆的研究が、Dollard et al.（1939）によって提唱された「欲求不満‐攻撃仮説」である。この仮説では、「欲求不満の存在は、常に何らかの形の攻撃行動を導く」、「攻撃行動は、常に欲求不満から派生する」という２つの命題をめぐってさまざまな議論が展開されたが、⑴欲求不満が、常に攻撃行動として表面化するとは限らない（すなわち、叫ぶ、逃避する、無関心になるといった攻撃以外の行動を引き起こすこともある）、⑵欲求不満がなくても、攻撃行動が生起することがあるなどの点から批判を受けた。こうした批判を踏まえて、Berkowitz（1974）は、Dollard et al.（1939）による「欲求不満‐攻撃仮説」を修正して、「手がかり‐喚起理論」を提唱した。この理論の特徴は、以下の４点である。⑴欲求不満は、攻撃へのレディネスを高めるが、必ずしも攻撃行動を生起させるわけではないとした点、⑵攻撃のレディネスは、欲求不満だけではなく、他者からの攻撃や既存の攻撃習慣などによっても誘発されるとした点、⑶「攻撃的意味を帯びた手がかり（aggressive cue）」が状況のなかに存在するときに、攻撃行動が生起するとした点、⑷攻撃のレディネスが極めて高いときには、「攻撃的意味を帯びた手がかり」が存在していなくても、攻撃行動が生起する可能性があるとした点である。

[11] Berkowitz（1989），pp. 59‐73. を参照。Berkowitz（1989）は、攻撃動機づけに関連した認知要因として、帰属や予測といったより精緻化された高次の制御的思考過程よりも、記憶ネットワーク内の連合的活性化伝搬など、意識的制御が働きにくく、半ば無意識的に起こる低次の自動的思考過程の関与を強調し、「攻撃プライミング」の導入を試みた。攻撃プライミングとは、攻撃的性質を持つ心的要素が活性化されていると、ある状況を解釈したり、それに反応したりする際、攻撃的な方向に歪みが生じることである。詳しくは、大渕（2000），74‐76頁を参照。

[12] 大渕（1993），237‐240頁。

[13] 対人葛藤を解決・回避したいという動機づけが攻撃行動を導くことから、不快事象が攻撃反応を動機づけると仮定する情動発散説とは共通点がみられるが、自発的な攻撃衝動の昂進を仮定する内的衝動説とは対立する。

[14] 個人の判断は必ずしも合理的ではなく、情動覚醒や時間的切迫によって歪められることがある。しかしながら、基本的には高次の認知判断が、攻撃の反応過程を支配するという考え方が強く存在しており、この点でも不快事象が無条件に攻撃反応傾向を喚起するとか、連合的な過程によって攻撃反応を説明する情動発散説とは対照的である。

[15] Krahé（2001=2004），37頁。

３．ＧＡＭの特徴

前章の議論で、衝動的攻撃は情動発散説によって説明が可能であり、戦略的攻撃は社会的機能説によって説明が可能であることを明らかにした。現実社会における攻撃行動は、衝動的攻撃と戦略的攻撃が併存しており、男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズムを明らかにするためにも、衝動的攻撃と戦略的攻撃の２つの視点が必要であると考えられる。そこで本章では、衝動的攻撃と戦略的攻撃という攻撃行動に関する２つの見解を統合した理論的枠組みであるGAMの特徴について論じる。

これまでにも攻撃行動に関するさまざまな説明理論が提出されてきたが、近年、攻撃研究を専門とするAnderson and Bushman（2002）は、そうした理論を統合してGAMと呼ばれる総合モデルを提出した[16]。Lindsay and Anderson（2000）が提唱したGAAM[17]は、従来の理論が強調する多くの側面に対して統一的な枠組みを提供するものであった。その後、Anderson and Bushman（2002）は、Affectiveという修飾語を取り除き、GAMと名称を変更し、攻撃行動全般を説明する統一的なモデルとして改めて提案している。

本稿の分析で用いるGAMは、男女の攻撃行動の差異を考慮せずに人間一般のモデルとして作成しているため、ジェンダーの視点を盛り込み、モデルの精緻化を図る必要があると考えられるものの、攻撃行動が生起するまでの段階が想定されており、男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズムを明らかにするうえで有用であると考える。

GAMは、攻撃行動が生起するまでの段階として、「入力（inputs）－経路（routes）－結果（outcomes）」の３段階を想定している。まず、入力は個人要因と状況要因から構成される。攻撃反応傾向の個人差を説明する個人要因には、「特性（traits）」、「性別（sex）」、「暴力に関する信念（beliefs）」、「暴力に関する態度（attitudes）」、「暴力に関する価値観（values）」、「長期的目標（long‐term goals）」、「スクリプト（scripts）」などが含まれる。攻撃行動を引き起こし、それを増幅させる状況要因には、「攻撃的手がかり（aggressive cues）」、「相手からの挑発（provocation）」、「目標妨害による欲求不満（frustration）」、「苦痛・不快経験（pain and discomfort）」、「薬物（drugs）」、「誘因（incentives）」など、いずれも不快感情を引き起こす出来事が含まれる。

次に、個人要因と状況要因から構成される「入力」が、内的状態である「経路」に影響を与える。経路は、「認知（cognition）」、「感情（affect）」、「覚醒（arousal）」の３つの要素から構成されており、それぞれ相互に作用しあっている。すなわち、不快な出来事は攻撃的な思考や敵意の帰属を促進し、敵意感情を生み、血圧や心拍を増大させる。こうした内的状態の変化を介して、最終段階である「結果」に至る。

最後に、結果では「評価・意思決定過程」として、どのような攻撃行動を表出するかを決定するための「即時的評価（immediate appraisal）」と「再評価（reappraisal）」が行なわれる。即時的評価は、自己の内的状態の変化と同時に攻撃行動を引き起こすとされるが、その際、内的状態を吟味するための時間や認知的資源に余裕があり、且つ、即時的評価によって生じた攻撃行動が満足のいく結果をもたらさないと予想される場合には、再評価を通じて状況が再解釈されうることも仮定している。

このように、評価・意思決定過程には、いわば自動的で無意識的に行なわれる「即時的評価」と、意識的に制御される「再評価」の２つの経路があり、即時的評価は衝動的攻撃を、再評価は戦略的攻撃をそれぞれ導くとされる。こうして出力された攻撃行動は、「社会的やりとり（social encounter）」を通して、「入力」の一部となる。

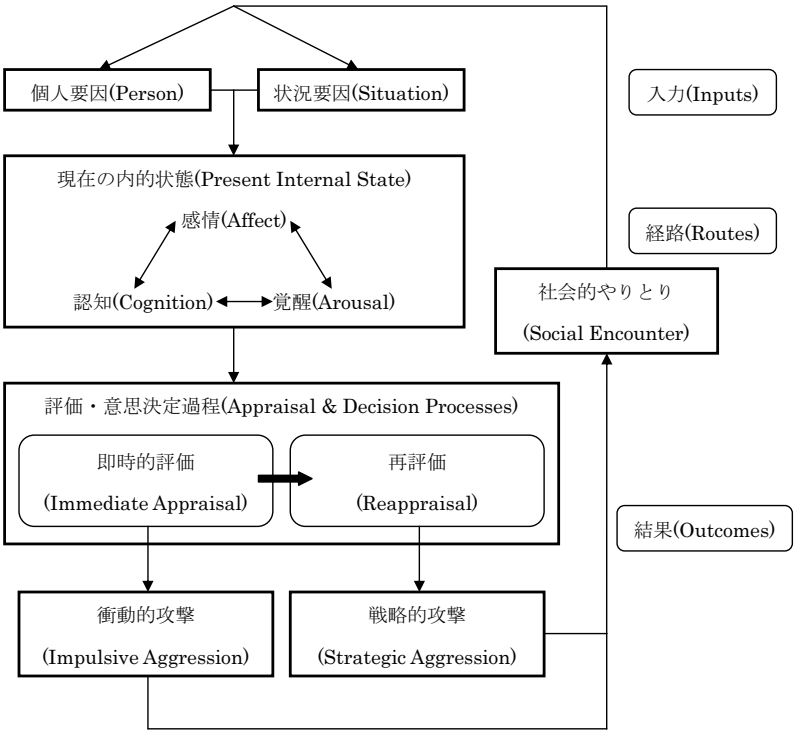
福野（2007）は、即時的評価から衝動的攻撃が生じる過程は、Berkowitz（1989）が提唱した「認知的新連合理論」とほぼ対応し、再評価から戦略的攻撃が生じる過程は、大渕（1987）が提唱した「攻撃機能論」およびTedeschi and Felson（1994）が提唱した「強制行為に関する社会的相互作用論」に対応すると指摘している[18]。

[16] Anderson and Bushman（2002）は、「認知的新連合理論（cognitive neoassociation theory）」、「社会的学習理論（social learning theory）」、「スクリプト理論（script theory）」、「覚醒転移理論（excitation transfer theory）」、「社会的相互作用論（social interaction theory）」といった５つの理論を統合する試みを行なった。

[17] GAAMは、General Affective Aggression Modelの略であり、感情的攻撃の一般モデルと訳されている。

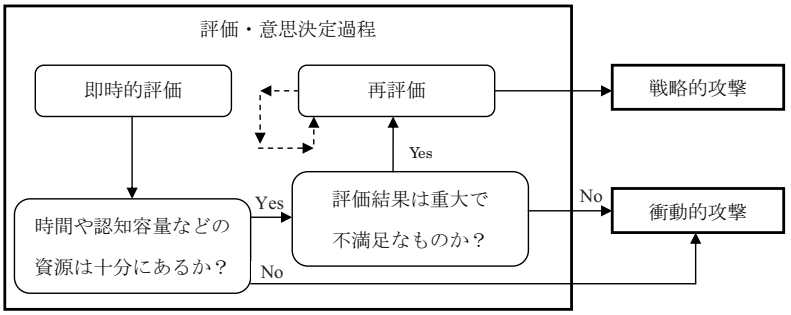
[18] 福野（2007），90‐93頁を参照。

図１　GAMのプロセス



〈出典：Anderson and Bushman(2002), p. 34 の Figure 2 より引用、一部改変〉

図２　GAMの評価・意思決定過程の詳細図



〈出典：Anderson and Bushman(2002), p. 40 の Figure 3 より引用、一部改変〉

４. 男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズム

本章では、まず、個人要因と状況要因をジェンダーの視点から論じる。次に、GAMの評価・意思決定過程に着目し、即時的評価から生じる衝動的攻撃と、再評価から生じる戦略的攻撃の視点から、男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズムを明らかにする。

4.1　個人要因と状況要因

本節では、個人要因と状況要因をジェンダーの視点から論じる。まず、個人要因として性差によって違いがみられる「攻撃性」と、攻撃性に関連した諸特性のひとつである「支配性」を取り上げ、先行研究の知見を整理する。

高橋・湯川(2008)は、攻撃性はジェンダー・イデオロギーと深く関わっており、攻撃性が男

性には容認されていることと、攻撃性が男性の人間関係の発達を妨害していることが問題であると指摘している。そして、男女ともに攻撃性を有しているものの、それを社会がどのように評価するかに性差があると述べている[19]。すなわち、女性にとっては攻撃性の表出そのものが女らしさに反するとされるのに対して、男性にとっては攻撃性の水準を高め、表出することが望ましいとされる[20]。Eagly and Steffen(1986)は、心理・社会的な損害を与える攻撃よりも、痛みや肉体的な傷害を与える攻撃に関して、男子の方が攻撃的であることを明らかにしている[21]。また、安藤ほか(1999)は、男子の方が身体的攻撃・言語的攻撃・敵意において、女子よりも高い値を示すことを明らかにしている[22]。

攻撃性に関連した諸特性のひとつとして、「支配性」が挙げられる。伊藤(1993)は、男性性の特徴として「優越志向」、「権力志向」、「所有志向」という３つの心理的傾向を挙げている[23]。伊藤(2008)は、「優越志向」とは競争に勝ちたい、他者より優越していたいという心理的傾向、「権力志向」とは自分の意志を他者に押し付けたいという心理的傾向、「所有志向」とは自分の所有物を自分のものとしてコントロールしたい、管理したいという心理的傾向を指すと述べている[24]。同様に、Connell(1995)は、ほとんどの文化や組織において、男性にはあらゆる面で支配的な立場に立とうとする傾向がみられるとし、「覇権的男性性(hegemonic masculinity)」という概念を提唱している[25]。

次に、女性家族介護者と比較した男性家族介護者に特有の特徴から、攻撃行動を喚起させる状況要因について論じる。第一に、男性家族介護者には、家事・介護スキルの乏しさに起因する困難がみられる。津止・斎藤(2007)は、介護スキル以前の問題として、家事を中心とする男性の生活自立能力が問われており、家事スキルの有無が男性家族介護者の抱える困難や負担の最初の分岐点であると指摘している[26]。また、森(2008)は、性別役割分業意識の強い男性であれば、家事が苦手である、あるいは苦手ではなくても精神的な苦痛を伴う場合があると指摘している[27]。

第二に、男性家族介護者には、ジェンダーと身体接触における葛藤がみられる。津止・斎藤(2007)は、「入浴介助」、「排泄介助」、「身体の清拭」といった身体接触を伴う介護行為に困難を感じている男性家族介護者が多いことを明らかにしている[28]。山田(2008)は、男性と女性では他者への身体接触の許容性が異なっており、女性からの身体接触は母親役割の延長線上として理解されるのに対し、男性からの身体接触は性的行為を潜在的に含むものとして理解される傾向にあると指摘している[29]。

第三に、男性性における葛藤がみられる。男性にとって介護役割とは、ジェンダー・アイデンティティの揺らぎという困難を伴う[30]。伝統的な男性規範[31]に忠実に従った行動をとれば、男性家族介護者が他者との関係において、悩みや苦しみを打ち明けることは困難であると推測される。例えば、一瀬(2004)では、介護困難を自分だけで解決しようとし、他者に相談しない傾向[32]が、羽根(2006)でも、支援を受けず求めず自分ひとりで介護をするという決意の貫徹が確認されている[33]。また、津止・斎藤(2007)は、男性家族介護者は同居家族からの情緒的支援が

[19] 高橋・湯川(2008)，65頁。
[20] 同書，66頁。攻撃性の水準を高め、表出することが男性にとって望ましいとされるのは、攻撃性が男らしさの証しである「優越性」を示すだけではなく、攻撃的であることが他者との競争に勝つための手段のひとつとなりうるからである。
[21] Eagly and Steffen(1986)，pp. 309‐330.
[22] 安藤ほか(1999)，384‐392頁。
[23] 伊藤(1993)，166‐167頁。
[24] 伊藤(2008)，84‐85頁。
[25] Connell(1995)，pp. 76‐78.
[26] 津止・斎藤(2007)，56頁。
[27] 森(2008)，109頁。
[28] 津止・斎藤(2007)，57‐58頁。「入浴介助」、「排泄介助」、「身体の清拭」といった身体への直接的な介助については、妻を介護する夫グループよりも、老親を介護する息子グループの方が困っていると回答する割合が高い。
[29] 山田(2008)，142‐151頁。
[30] 津止・斎藤(2007)，176頁。
[31] 伝統的な男性規範とは、「男は弱みを見せない」、「男は弱音を吐かない」、「男は常に冷静で感情を抑制しなければならない」、「男は独立的でなければならない」、「問題は自分ひとりで解決しなければならない」といった規範を指す。
[32] 一瀬(2004)，75‐90頁。
[33] 羽根(2006)，27‐39頁。

相対的に低い傾向にあると指摘している[34]。

4.2　男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズム

本節では、GAMの評価・意思決定過程に着目し、即時的評価から生じる衝動的攻撃と再評価から生じる戦略的攻撃の視点から、男性家族介護者による高齢者虐待生起のメカニズムを明らかにする。

GAMに従えば、家事や介護行為に追われて内的状態を吟味するための時間的余裕がない、あるいは、介護に没頭してしまうことによって認知的資源に余裕がない男性家族介護者は、即時的評価を通じて衝動的攻撃を行なう可能性が高いと考えられる。

例えば、男性家族介護者には介護に没頭してしまう傾向がみられる。羽根(2006)は、男性が家事や介護役割を担うことを社会が特別視、すなわち賞賛する傾向は、男性家族介護者を一層介護に打ち込ませると指摘している[35]。無藤(2008)も、「介護は女性がするもの」という考え方の裏返しとして、男性が介護役割を担うことを賞賛することは、善意からの激励であると同時に、男性家族介護者を一層介護に打ち込む方向へ押すことにつながると指摘している[36]。このように、男性家族介護者が介護に没頭してしまう傾向は、ともすれば「社会的孤立」に陥る危険性を孕むものであり、衝動的攻撃を行なう可能性につながると考えられる。

一方、長期間の介護生活を送ることによってもたらされる家事や介護行為への慣れ、介護の否定的側面のみならず肯定的側面への気付き、家族会に参加して介護困難を吐露するなど、内的状態を吟味するための時間や認知的資源に余裕がある男性家族介護者は、衝動的攻撃を選択せず再評価を通じて状況を再解釈し、戦略的攻撃を行なう可能性が高いと考えられる。

例えば、津止・斎藤(2007)は、男性家族介護者による介護期間の長(５年以上)／短(５年未満)によって、介護事件に対する意見に違いがみられるかを分析している。その結果、介護事件に対して歴然とした批判的意見を述べている男性家族介護者のほとんどが、介護期間が長いことを明らかにしている。この点に関して、介護期間が長期化するにつれて、介護の辛さや苦しみを感じるのと同時に、介護に楽しさや喜びを見出せるようになるため、介護事件によって現状を破壊しようとする考えに対しては、批判的になるのではないかと考察している[37]。

林(2003)は、常に夫が妻に対する責任の主体を握り、妻が夫主導の介護に従っている状況が多いことを指摘している[38]。無藤(2008)は、男性家族介護者は介護に対する目標を定め、方針を立て、要介護者の状態の維持・改善といった成果を追求することが多くみられると指摘している。また、自分が正しいと思うことを優先し、それに妻をいわば従わせるような行動のあり方も指摘されている[39]。林(2003)と無藤(2008)の知見は、大渕(1987)の「攻撃機能論」およびTedeschi and Felson(1994)の「強制行為に関する社会的相互作用論」で説明が可能であり、戦略的攻撃の特徴を反映した介護行為であるといえる。

５.おわりに

本稿では、Anderson and Bushman(2002)が提唱したGAMを用いて、男性家族介護者が高齢者虐待を引き起こすメカニズムを、衝動的攻撃と戦略的攻撃の視点から明らかにした。

分析の結果、家事や介護行為に追われて内的状態を吟味するための時間的余裕がない、あるいは、介護に没頭してしまうことによって認知的資源に余裕がない男性家族介護者は、即時的評価を通じて衝動的攻撃を行なう可能性が高いことが導き出された。一方、長期間の介護生活を送ることによってもたらされる家事や介護行為への慣れ、介護の否定的側面のみならず肯定

[34] 津止・斎藤(2007)，52頁。情緒的支援とは、介護の相談や愚痴を聞いてもらうこと、気晴らしの相手をしてもらうなどの支援を指す。
[35] 羽根(2006)，27‐39頁。
[36] 無藤(2008)，133‐140頁。
[37] 津止・斎藤(2007)，158‐160頁。介護事件に対する批判的意見とは、介護事件を起こす介護者の気持ちが理解できない、また、このような事件自体を理解できないという介護事件を批判的に捉えた意見である。
[38] 林(2003)，38‐50頁。
[39] 無藤(2008)，138頁。

的側面への気付き、家族会に参加して介護困難を吐露するなど、内的状態を吟味するための時間や認知的資源に余裕がある男性家族介護者は、衝動的攻撃を選択せず再評価を通じて状況を再解釈し、戦略的攻撃を行なう可能性が高いことが導き出された。

最後に、本稿における分析結果から、男性家族介護者による高齢者虐待を防止するための介入策や支援策を提案する。GAMの評価・意思決定過程では、内的状態を吟味するための時間的余裕と認知的資源の多寡が、衝動的攻撃と戦略的攻撃の選択に影響を与えると仮定されていた。この観点から考えるならば、介護生活において時間的余裕を作ることと認知的資源に余裕を持たせることが、衝動的攻撃を回避することにつながるであろう。介護生活における時間的余裕と認知的資源に余裕を持たせるためにも、男性家族介護者を社会から孤立させないことが、高齢者虐待防止のための喫緊の課題であると考える。

参考文献

Anderson, C. A., and Bushman, B. J.,‘Human Aggression’, Annual Review of Psychology, 53, 2002, pp. 27‐51.

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子「日本版Buss‐Perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性，信頼性の検討」『心理學研究』第70巻第５号，1999年，384‐392頁。

Baron, R. A., and Richardson, D. R., Human Aggression (Second Edition), Plenum Press, 1994.

Berkowitz, L.,‘Some Determinants of Impulsive Aggression: Role of Mediated Associations with Reinforcements for Aggression’, Psychological Review, 81(2), 1974, pp. 165‐176.

Berkowitz, L.,‘Frustration‐Aggression Hypothesis: Examination and Reformulation’, Psychological Bulletin, 106(1), 1989, pp. 59‐73.

Connell, R. W., Masculinities, Polity Press, 1995.

大坊郁夫・安藤清志「援助と攻撃」(安藤清志・大坊郁夫・池田謙一『現代心理学入門４　社会心理学』岩波書店, 1995年)，130‐140頁。

Dollard, J., Doob, L., Miller, N.E., Mowrer, O.H., and Sears, R.R., Frustration and Aggression, Yale University Press, 1939.

Eagly, A. H., and Steffen, V. J.,‘Gender and Aggressive Behavior: A Meta-Analytic Review of the Social Psychological Literature’, Psychological Bulletin, 100, 1986, pp. 309‐330.

藤原武弘「攻撃行動と援助行動」(藤原武弘編『社会心理学』晃洋書房，2009年)，117‐128頁。

福野光輝「攻撃行動」(山田一成・北村英哉・結城雅樹編『よくわかる社会心理学』ミネルヴァ書房，2007年)，90‐93頁。

羽根文「介護殺人・心中事件にみる家族介護の困難とジェンダー要因―介護者が夫・息子の事例から」『家族社会学研究』第18巻第１号，2006年，27‐39頁。

林葉子「有配偶者男性介護者による介護役割受け入れのプロセス―グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて」『家族研究年報』28，2003年，38‐50頁。

一瀬貴子「『介護の意味』意識からみた、高齢配偶介護者の介護特性―高齢男性介護者と高齢女性介護者との比較」『関西福祉大学研究紀要』第７号，2004年，75‐90頁。

伊藤公雄『〈男らしさ〉のゆくえ―男性文化の文化社会学』新曜社，1993年。

伊藤公雄『新訂　ジェンダーの社会学』放送大学教育振興会，2008年。

春日キスヨ「高齢者虐待と養護者支援―増大し続ける実子(とりわけ単身子)虐待加害者問題を中心として」(上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也編『ケア　その思想と実践４　家族のケア　家族へのケア』岩波書店，2008年)，179‐197頁。

Krahé, B., The Social Psychology of Aggression, Psychology Press, 2001.(秦一士・湯川進太郎編訳『攻撃の心理学』北大路書房，2004年)。

Lindsay, J. A., and Anderson, C. A.,‘From Antecedent Conditions to Violent Actions: A General Affective Aggression Model’, Personality and Social Psychology Bulletin, 26, 2000, pp. 533‐547.

森詩恵「男性家族介護者の介護実態とその課題」『大阪経大論集』第58巻第７号，2008年，101‐112頁。

無藤清子「介護とジェンダー―高齢者介護を担う男性と女性の問題」(柏木惠子・高橋惠子編『日本の男性の心理学―もう１つのジェンダー問題』有斐閣，2008年)，133‐140頁。

大渕憲一「攻撃の動機と対人機能」『心理學研究』第58巻第２号，1987年，113‐124頁。

大渕憲一『人を傷つける心―攻撃性の社会心理学』サイエンス社，1993年。

大渕憲一『攻撃と暴力―なぜ人は傷つけるのか』丸善，2000年。

大渕憲一「攻撃と社会的勢力」(潮村公弘・福島治編『社会

心理学概説』北大路書房，2007年），53‐62頁。
高橋惠子・湯川隆子「ジェンダー意識の発達―男らしさもつくられる」（柏木惠子・高橋惠子編『日本の男性の心理学―もう１つのジェンダー問題』有斐閣，2008年），53‐73頁。
Tedeschi, J. T., and Felson, R. B., Violence, Aggression, and Coercive Actions, American Psychological Association, 1994.
津止正敏・斎藤真緒『男性介護者白書―家族介護者支援への提言』かもがわ出版，2007年。
山田昌弘「ケアとジェンダー」（江原由美子・山田昌弘『ジェンダーの社会学入門』岩波書店，2008年），142‐151頁。
湯川進太郎「仮説的構成概念としての行動の意図性―社会心理学における攻撃研究から」『行動科学』第40巻第２号，2001年，63‐69頁。
湯川進太郎「攻撃・援助」（唐沢かおり編『朝倉心理学講座７ 社会心理学』朝倉書店，2005年），111‐122頁。